

# 副詞「結局」の定着と意味用法について

## —雑誌『太陽』を中心に—

趙英姫\*

(e-mail: yhee0410@ggu.ac.kr)

---

### 目次

---

1. はじめに
  2. 明治期における副詞「結局」の使用状況
    - 2.1 明治期の国語辞書類の「結局」の記述
    - 2.2 明治期の作品における「結局」の使用状況
  3. 『太陽コーパス』を中心にみた副詞「結局」の定着
  4. 副詞「結局」の意味用法
    - 4.1 「最終局面提示」の用法
    - 4.2 「結論的な判断提示」の用法
  5. まとめ
- 

## 1. はじめに

副詞「結局」は、次の例にみるように現代日本語において新聞の文章のような書き言葉はもちろん、日常の会話文にもよく使われる、使用頻度の高い漢語副詞である。

[01] 政府の各種の補助金の中には、効果が薄く結局無駄遣いに終わるものが多い。政府のカネをばらまくことによって、自民党の票田培養の役には立つが、地方自治を阻害する性格のものも多い。 (『朝日新聞』、社説、1985.2.27)

[02] 仕事が忙しいときには、単調な毎日の繰り返しが苦痛だった。何のための人生 だろうと、仕事を呪わしく思ったこともあった。だが、昨今、仕事が途切れるようになって、いつでも行きたいところへ行けると思うと、逆にどこへも出掛けたくない気持だ。結局、不精な質なのだと思う。最近では、案外、これが自分に一番向いた天職なのだと思うようになっている。 (泡坂妻夫『折鶴』、1987、p.208)

---

\* 金剛大学校 助教授 日本語学

[03] 昭夫「この前、悪かったな。あの人と壊れてないんだろ。……あの程度のこととて壊れる関係じゃないよな」静香「……今日、五代さんに怒られちゃった。あの人が間を取ってるのに、私、プロンプしちやって、……なんか、プロンプしなかったのよ……役に立ちたいっていうか……でも、助けなんか要らない人なのよね」昭夫「……好きなんだよな、結局」 (シナリオ『Wの悲劇』、1984、p.276)

『日本国語大辞典』には、「結局」の語誌について次のことが記されている。もとは「囲碁を一番打ち終える」の意味であったが、江戸時代末期に「はて、結末」の意味に転用された。副詞の用法はやや遅れて成立し、それ以前は詩歌の用語から転用した「結句」が使用されていた。

(『日本国語大辞典第二版』第四巻、2001、p.1374)

本来中国語である漢語は、最初は体言として日本語の中で使用され始め、多様な品詞性を持つようにいたったものが多いが、副詞「結局」も最初は体言の囲碁の用語として使われていたものが、副詞に用法が転用された経緯がうかがえる。『日本国語大辞典』の記述によると、「結局」の意味が「はて、結末」に転用されたのは江戸時代末期で、「結局」の副詞用法が定着したのは日本語に漢語が大流行した明治期である可能性が高い。

本稿では、漢語副詞「結局」を取り上げ、体言から転用された副詞用法が定着していく過程及び副詞「結局」の意味用法について考察することを目的とする。資料は、明治期の国語辞書類のほか、明治の言文一致期以降明治末期までの小説をはじめとするいくつかのジャンルの作品を対象とする。特に、「結局」の副詞用法の定着及び意味用法の分析の際は、ほかのジャンルに比べて副詞「結局」の使用例が多くみられる雑誌『太陽』を中心に調査した。

## 2. 明治期における副詞「結局」の使用状況

### 2.1 明治期の国語辞書類の「結局」の記述

明治期における「結局」の使用状況をみるために、当時の主な国語辞書類で「結局」を引いてみた。参考として、『日本国語大辞典』の「結局」の語誌のところに言及されている「結句」もいっしょに引いてみた。

- 『和英語林集成初版』(慶応3年(1867))  
「結局」：見出し語なし  
「結句」：KEKKU,ケツク, 結句, conj.On the contrary, rather, better.  
The last word of a sentence or stanza of poetry.
- 『和英語林集成再版』(明治5年(1872))  
「結局」：見出し語なし

「結句」：KEKKU,ケツク, 結句, conj.On the contray, rather, better; also the last word of a sentence or stanza of poetry. —yoroshii.

- 『和英語林集成第三版』(明治19年(1886))

「結局」：KEKKYOKU ケツキヨク 結局(tsumari) In the end:—ron, eschatology.

「結句」：KEKKU ケツク 結句 conj. On the contrary, rather, better. The last word of a sentence or stanza of poetry. :—yoroshii.

- 『漢英対照いろは辞典』(明治21年(1888))

「結局」：けつきよく(名) 結局, をはり, つまり Conclusion, final issue.

「結句」：けつく 結句, をはりのく; [俗] (副) いつそ, あげくのはて

The conclusive line;col. in the end, finally, after all.

- 『日本辞書言海』(明治22~24年(1889~1891))

「結局」：けつ=きよく(名) 結局 ヨサマリ。ヨハリ。ヨハテ。

「結句」：けつ=く(名) 結句 詩、歌ノ末ノ句。(起句ノ條、見合ハスベシ)

- 『日本大辞書』(明治25~26年(1892~1893))

「結局」：けつ・きよく ((……)) (全平) 名。{ (結局) } 漢語。ヲハリ。=ヲサマリ。⇒ドノツマリ。⇒ハテ。

「結句」：けつ・く((……))(……)名。{ (結句) } 漢語。終リノ句 (主ニ詩歌ニイフ)。

限られた調査ではあるが、上にあげた6種の国語辞書類を調べた結果、次のことがわかる。調べた辞書類で「結局」の見出し語がはじめてみられるのは、明治19年の『和英語林集成第三版』で、それ以降の国語辞書には全部見出し語として載っている。ただし、調べた国語辞書類に記述されている「結局」の意味は「終わり、はて」の体言の意味であり、副詞用法を明記しているものはみられない。もっとも、『漢英対照いろは辞典』には、「結局」に相当する英語訳として「conclusion, final issue」があげられているが、これは体言としての「結局」の意味の記述である可能性が高い。実際、和英の部に「結局」が見出し語として載っている『和英語林集成第三版』の場合、英和の部をみると、次に示すように、「In the end, Finally, At last」の英語副詞の訳語に「結局」は当てられていない<sup>1)</sup>。

- 『和英語林集成第三版』(明治19年(1886))

END, n. (省略) In the 一, tsui ni, shosen.

FINALLY, adv. Tsui ni, ageku ni, hate ni, owari ni, shimai ni, toto.

LAST, a. (省略) At last, tsui ni, toto, yoyaku, yoyo, yatto, shosen. (省略)

1) 語釈中の「省略」は筆者によるもの。

すなわち、明治期の国語辞書類の調査を通じて「結局」は少なくとも明治20年前後には使われていたと考えられるが、それは主に体言としてであり、副詞用法は一般的には定着していなかったとみられる。

一方の「結句」は、『和英語林集成』初版と再版、第三版では、「いっそ」の意味として記述されており、「結句」の意味を「結局」と同じ意味で記述したのは、調べた国語辞書類では『漢英対照いろは辞典』（明治21年(1888)）が初めてである。『漢英対照いろは辞典』には、「結句」は主に俗語として使われていたと記述されている。ところが、その後の『日本辞書言海』（明治22～24年(1889～1891)）と『日本大辞書』（明治25～26年(1892～1893)）の「結句」の記述では副詞用法の記述はない。すなわち、「結句」は一時俗語的に副詞として使われていたものの、広くは定着しなかったと推測される。

## 2.2 明治期の作品における「結局」の使用状況

次に、明治期の国語辞書類に続いて副詞「結局」の実際の使われ方をみるために、明治の言文一致期以降明治末期までの小説と雑誌、啓蒙書、教科書、小新聞から副詞「結局」の用例を採集した<sup>2)</sup>。その結果を次のページの表1にまとめる。調べた作品の詳細は論文の末尾に示す。参考として、「結局」と意味が似ている漢語副詞「とうとう」も一緒に調べて集計した。ちなみに、「結句」は小説2例、雑誌1例、啓蒙書1例、合計4例が採集されたが、いずれも「かえって、むしろ」の意味で使われており、「結局」と同じ意味で使われた例はみられなかった。

表1によると、「結局」は「とうとう」と比較すると使用例が少なく、当時は「結局」よりは「とうとう」が好まれて使われていたことがわかる。次のページの例 [14] [15] は、小説の「結局」の例である。

表1 言文一致期以降明治末期までの作品にみられる「結局」と「とうとう」の用例の集計

	小説	雑誌『太陽』	啓蒙書	教科書	小新聞	計
結局 (は)	2	5(1)	1	0	0	8
とうとう	51	3	0	20	16	90

(括弧内の数字は「結局は」の用例数である)

2) 調べた各ジャンルのテキストの分量は均等ではなく、小説作品の分量がもつとも多い。小説は延べ語数（漢語副詞と漢語の形容動詞の連用形の延べ語数をいう、以下同様）約4000語、小新聞約1400語、雑誌『太陽』約1700語、教科書約600語、啓蒙書約700語を目安に採集したものである。雑誌『太陽』は明治の言文一致期から明治末期までの中間に当たると考えられる1901年（1号から12号）の小説を除いた口語体の記事だけを対象とした。したがって、表1と表2では雑誌『太陽』の調査範囲が異なるため、集計結果に違いがある。啓蒙書と小新聞は、明治初期に盛んだったジャンルであるため、年代上言文一致期以前のものも含まれている。

[04] 「ところへ閑人が物珍しそうにぼつぼつ集ってくる。仕舞には東風と独逸人を四方から取り巻いて見物する。東風は顔を赤くしてへどもどする。初めの勢に引き易えて先生大弱りの体さ」 「結局どうなったんだい」

(夏目漱石『吾輩は猫である』上編、1905、p.136)

[05] 必竟〔つまり〕結局〔けっきょく〕はチックがジエークの方を附けて、一手に客をとる様になり、其上新しい刷毛〔はけ〕や非常に目にたつ看板と服が出来たことでした。

(若松賤子『小公子』、1890-1891、p.106)

さらに、表1からは「結局」は平易な文章で書かれた教科書や、話し言葉に近い談話体で書かれた小新聞の使用例はなく、雑誌『太陽』のような硬い論説調の文章によく使用される、という文体的な特徴が指摘される。逆に、一方の「とうとう」は小説や教科書、小新聞の使用例に比べると、雑誌『太陽』の使用例が少なく、「結局」と「とうとう」は対照的である。次は、教科書と小新聞の「とうとう」の使用例である。

[06] ソノ ヒ ノ ユフガタ、カゼ ガ、タイソー、ツヨク、フキダシマシタ。タケハ、オトナシク、カゼ ノ フク トホリ ニ ナッテキマシタ。カシ ノ キハ、ゴージョーニ、カゼ ニ ムイテ、イバッテキマシタ。スルト、カゼ ガ オコッテ、ヒドイ オト ヲ サセテ、トートー、カシ ノ キ ヲ ヲッテシマヒマシタ。

(『国定読本』第一期卷三、p.25)

[07] 今月十日の夜る西の久保八幡町のさくら湯へ三十ばかりの男が入湯に参り一ト風呂はいると直に息が止っていろいろ手当を致したれど養生が叶わずとうとう死んでしまいました。迷惑なのは湯やでござります。(『読売新聞』、1875.7.13)

「とうとう」は、全体の使用例90例のうち、漢字表記の「到頭」で表記された例は5例で、ほかは平仮名または片仮名表記の例である。このことは、当時の人にとって「とうとう」は漢語という意識が薄く、和語副詞同様に認識されるぐらい日常語化していたことを物語っている。以下に、「とうとう」の平仮名表記の使用例と漢字表記の使用例を示す。

[08] 忪えに、忪えに、忪えて見たが、とうとう忪え切れなくなって、「して見ると、同じように苦しんでいるかしらん」、はッと云っても追付かず、こう思うと、急におそろしく気の毒になって来て、文三は狼狽てて後悔をしてしまった。

(二葉亭四迷『浮雲』第三編、1889、p.5)

[09] それから藍色の牡丹くづしの糯珍[しゅっちゃん]を描いて裾へ赤く稲妻を染め出した白縮緬の長襦袢一つになり、折角めかし込んできた衣装を一枚一枚剥がされて、到頭裸にされてしまいました。

(谷崎潤一郎『髑髏』、1910、p.48)

以上、明治の言文一致期以降明治末期までの「結局」と「とうとう」の比較を通じて、副詞「結局」の使用頻度が類義語である副詞「とうとう」と比べて高くなかったこと、さらに「結局」は調べた調査の範囲でいうと、主に雑誌『太陽』のような硬い文体に使われる傾向がみられることを確認した。

### 3. 『太陽コーパス』を中心にみた副詞「結局」の定着

ここでは、ほかのジャンルより副詞「結局」の使用例が多くみられる雑誌『太陽』を中心に、「結局」が体言から副詞へと用法が転用され、定着していく過程をみることにする。雑誌『太陽』（博文館）は、1895（明治28）年1月1日から1928（昭和3）年2月1日まで刊行された総合雑誌である。雑誌『太陽』は当時他誌に比べて桁違いの部数で発行され、刊行期間も19世紀から20世紀にわたり一世代以上に及び、まさに時代を代表する雑誌であった<sup>3)</sup>。多様なジャンルの記事で構成され、幅広い読者層を持っていたことから、当時の日本語の実態をうつしだした資料としての価値が認められる。雑誌『太陽』の記事は、歴史、技術工学・工業、社会科学、産業、文学、自然科学、哲学、芸術の多様な分野の著者が書いたもので、ほとんどが論説調のものである。

本稿の調査は、国立国語研究所編『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース』（博文館新社、2005）（以下、『太陽コーパス』と呼ぶ）を使用した。以下に、『太陽コーパス』で対象とした雑誌『太陽』の分量と年次別記事数と文字数を引用する。年によって記事数と文字数に多少の差があるが、全体的に均等である傾向がみられる。

年	記事数	文字数
1895年	729	3335367
1901年	635	3154563
1909年	652	2860352
1917年	503	2647455
1925年	889	2453905
計	3408	14451642

1895年	12冊	第1巻1号～12号
1901年	12冊	第7巻1号～14号（臨時増刊2冊を除く）
1909年	12冊	第15巻1号～16号（臨時増刊4冊を除く）
1917年	12冊	第23巻1号～14号（臨時増刊2冊を除く）
1925年	12冊	第31巻1号～14号（臨時増刊2冊を除く）

（国立国語研究所編(2005b)、p.5）

『太陽コーパス』から採集した副詞「結局」の集計を次の表2とグラフ1で示す。表2の括弧内の数字は文語の用例数を意味する。グラフ1では、表2の集計を口語の例と文語の例を分けてグラフで示した。なお、表2の集計は「結局」が副詞以外のほかの品詞で

3) 上野隆生(2007、p.252)を参考にした。

使われた例は除き、副詞の例だけを集計したものである。

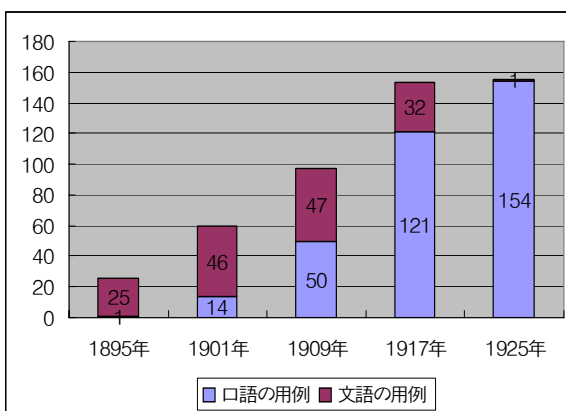
表2とグラフ1からは、時代が現代に近づくほど副詞「結局」の使用例が増加する傾向が見て取れる。さらに詳しくは、1895年と1925年間の用例数の単純比較で言うと、30年の間に副詞「結局」の用例数は約6倍増えた結果となる。また、文語と口語では、文語の例が減少し、口語の例が増加しているが、これは雑誌『太陽』の記事が文語文中心から年次を追うごとに口語文中心に移行していくので、自然な結果といえる<sup>4)</sup>。

表2 『太陽コーパス』の副詞「結局」の用例数

年	用例数
1895年	26(25)
1901年	60(46)
1909年	97(47)
1917年	153(32)
1925年	155( 1)
計	491(151)

(括弧内の数字は文語の用例数)

グラフ1 『太陽コーパス』の副詞「結局」の用例数の推移



次のページの表3は、「結局」が文中で副詞以外の品詞、すなわち体言または和語の「一スル」がついたサ変動詞などで使われた使用例を集計したものである。表3には、「結局」の副詞以外の品詞の使用例が年次を追うごとに徐々に減少していく傾向が表れている<sup>5)</sup>。すなわち、表2とグラフ1、表3から、『太陽コーパス』を通じて「結局」の副詞用法が定着していく一方で、副詞以外の品詞の用法は衰退していくことが確認できる。「結局」の副詞以外の品詞の例は体言の例、サ変動詞の例、「その他」に分類される。

表3 『太陽コーパス』の「結局」の副詞以外の品詞の用例数

年度 (用例数)	品詞
1895年(25)	体言 (15)
	用言 ( 3)
	その他 ( 7) : その結局、—した (する) 結局 (は)

4) 国立国語研究所編(2005, p.5)によると、1895年には口語記事率が5.3%で、文語記事率が94.5%だったが、1925年には口語記事率が93.9%、文語記事率が5.8%に逆転している。

5) 特に1895年の記事に「結局」の体言の用例が多いのは、1895年の記事に日清戦争関連の記事が多く、「征清の結局」「戦争の結局」などの表現が繰り返し使用されているからである。

1901年( 9)	体言 ( 8)
	用言 ( 1)
1901年( 1)	体言 ( 1)
1917年( 3)	体言 ( 2)
	その他 ( 1) : 結局するところは( 1)
1925年( 4)	体言 ( 1)
	その他 ( 3) : 結局するに、結局するところ、結局して

例 [10] と例 [11] は、「終わり、はて」の意味の体言の例である。例 [12] の「結局ス」は「終結する」の意味、例 [13] は「ある結果に行き着く」の意味で使われている。

[10] 朝鮮及び台湾に関する談判も、亦先生の予期の如き結局を見たり。

(著者未詳「副島蒼海先生」、『太陽』第7巻13号、901.11)

[11] 今や日清両国の戦争は將に其結局を告げんとし、茲に第四回内国勲業博覧会を開設して全国の物産を一堂の中に陳列し、

(金子堅太郎「博覧会の沿革及其效能」、『太陽』第1巻5号、1895.5)

[12] 日本と露、独、仏三国との間に於て、此の条件を内定し、同時に三国は永久遼東半島に手を下さざる事、日本は台湾を他に割譲せざる事の保障を為したり、故に清国との談判は円滑に結局すべし

(著者未詳「時事」、『太陽』第1巻11号、1895.11)

[13] 木偶的委員の減少は適當なる委員の増加にして従て万国會議に我委員の臨む毎に我国光の幾分を海外に発輝するを得て日本全体の利益に結局す之を万国會議を我国に開きて得る利益の一とす

(松波仁一郎「万国會議」、『太陽』第7巻3号、1901.3)

表3の「その他」にあげられている「その結局」「—した(する)結局(は)」「結局するところは」「結局するに」などは、形態上は体言またはサ変動詞の用言と分類されるが、実際の文中での意味は、例 [10] から [13] にあげた体言や用言の意味とは異なる。これらは、全体が一つのまとまった表現として、前後する事態をつなぐはたらきをしているので、体言または用言と分類せず「その他」として分類した。要するに、これらの言い方は形は体言または用言の形をしているが、実際は一つのまとまった表現単位として文中で副詞「結局」に近い役割をしている。これらは、「結局」の副詞用法が定着する過程にみられる過渡期的な言い方と考えるべきであろう。

[14] 尤も偶然に冶金法に適して利益を占めて居る人もありますから、鉱山事業は危険を冒してやる一攫万金と云ふ様な事業として、此業に従事するものを危険者乃ち山師などと称してその結局鉱山事業を軽蔑する様になつたでありませうが、

(若山由五郎「冶金法の選定に就て」、『太陽』第1巻8号、1895.8)

[15] 要するに戦争は外観國家の権力の増進であるが結局する所は民主的内容の拡大



である。此事實は日本の如き国状に於ても到底之を免るゝことが出来ない。

(浅田江村「時局の印象」、『太陽』第23巻9号、1917.8)

- [16] 彼が、三島子に反抗する動機は、左程不純なものではないと、弁解する一派の人もゐる。或は、さうかもしれない。しかし、怪物の正体は結局するに、怪である。いづれとも、当人の意図を確めざる限り、いや、確かめた処で、政界の表裏は、秘密の鍵に握られてゐる今日、しかと見届ける訳にはいくまい。誰か、烏の雌雄を知らんや。

(無腸公子「貴族院の覆面冠者水野直子」、『太陽』第31巻7号、1925.6)

## 4. 副詞「結局」の意味用法

### 4.1 「最終局面提示」の用法

副詞「結局」は、文中でののはたらきによって、その意味用法を二つに分けて考えることができる<sup>6)</sup>。ここでは、そのうち「最終局面提示」の用法について述べることにする。例

[17] と例 [18] では波線部分にある事態が展開され、その事態が最終的に到達した最後の局面が「結局」によって示される。このように、ある事態が最終的に到達する局面を提示する用法を副詞「結局」の「最終局面提示」の用法とする。

- [17] 元来著作者の許諾なくして翻譯を為すと云ふことは、著作者に何等の報酬を与ふることを要しないからして、公衆並に出版者は、大に利益を得るが如く見えるが、實際は決してさうでないのである、翻譯自由の主義を認めるときは、何人も随意に他人の著書を翻譯することが出来るからして、競争が起つて、同一の著書に就て数種の翻譯書が出て、結局出版者は十分利益を受くること能はざるに至る、

(水野鍊太郎「伯林に於ける著作権保護万国會議の状況」、  
『太陽』第15巻6号、1909.5)

- [18] 是れ固より聯合國相互の義務である。併しながら如何に義務なればとて之が為めに無際限の犠牲を払つて疲弊の極に陥り、共倒れとなり、聯合各国とも結局一物も得る所なくして終はる如きは愚の極である。

(浅田江村「講和乎 恒久戦乎」、『太陽』第23巻1号、1917.1)

6) 「結局」の先行研究には森本順子(1994)がある。森本は池谷清美(1986)の「結局」の研究をまとめて紹介している(森本順子(1994)の本文には池谷清美(1986)からの引用と記されているが、末尾の引用参考文献には池谷清美(1983)しかなく、本稿の参考文献でも池谷清美(1983)で示した)。それによると、「結局」の用法は命題を指向する「命題指向」の用法とディスコースを指向する「ディスコース指向」の用法に分けられている。「命題指向」の用法は、ディスコースの終りで何が起ったかを示すが、「ディスコース指向」の用法では、話し手が結論的な発言をすと述べられている。「命題指向」と「ディスコース指向」の用法と本稿で示した「最終局面提示」と「結論的な判断提示」の用法とは、似ている点があるが、森本順子(1994)の「結局」についての記述が簡略で本格的な比較はできない。また、森本順子(1994)では「結局」がSSA(a speaker's subjective attitude)副詞のグループの一つとして取り上げられているが、この点は本稿の立場とは異なる。

ある事態が展開され最終的な局面に至る際、その展開は必然的に時間の流れにしたがって順次的に起ることになる。「結局」の「最終局面提示」の用法の文が、「て(に) 終わる」「ことに (と) なる」「に至る」「に帰する」「に帰結する」などの文末表現で終わることが多いのも、これらの文末表現に時間軸による事態の進行の意味が内包されているからであろう。

- [19] 第一児玉氏が経済上大なる矛盾に陥つて居られると私の思ふ点は、貿易の均衡を得る手段として自給自足を唱へらるゝことである。自給自足を実にせんには国内の産業を極度に保護せねばならぬ。その結果は輸出を衰退せしめ結局自給自損に終ることは明白である。

(武藤山治「正金銀行児玉頭取に望む」、『太陽』第31巻3号、1925.3)

- [20] しかしね株と云ふ奴、当れば大きいやうだけれども永い目で見ると中々うまくは行かないもんだ、千載一遇の好材料かなんかのあつた時に一年に一度とか、二年に一度とか、ばかり大山を張つて当つたら当りつばなしにしてみればいゝが、一度手を染めると慢性になつて、たうとう始終やることになる、結局最後の勘定は損になつてしまふものだ。

(白雨楼「財界抜裏物語(一)」、『太陽』第31巻5号、1925.5)

- [21] ピットが此の計畫を立てた始めは、基金として毎年百万磅を一般歳入より繰入れられる計畫であつたが、後には之のみに満足せないで、之を百二十万磅に増加したから、償還基金の非常な巨額に達したと共に、他の一方では国債現在高も、また頗る膨脹するに至り、結局失敗に歸したのである。

(浩東生「当面の財政問題(誤られんとする国債政策)」、『太陽』第23巻2号、1917.2)

「結局」の「最終局面提示」の例には、例 [19] から [21] のように、「最終局面」にいたるまでの事態の展開の様子が時間軸にしたがって示される場合もあるが、次の例 [22] と [23] のように、事態展開の様子が省略され、事態が最終的にいたった最終局面だけが示される場合もある。例 [22] と [23] では、最終局面に至るまでの細かい経緯は省かれ、最後に至った局面だけが提示される。

- [22] 伊太利では此事を痛切に感じて、各地の移民の代表者が集つて、移民会議を開いて、如何にすれば移民をして伊太利本国に対する愛国心を維持せしむるを得べきかといふ問題を講究したことがあつたが、結局学校を設けて教育の力で以てやる、それには伊太利政府から補助をするといふことに決したがね。

(亀山松次郎(談)「名士の伊太利観伊太利の現状」、『太陽』第15巻12号、1909.9)

- [23] 最も注意すべきは酌婦の問題で、彼等は多く親に売られ又は誘惑されて、千葉埼玉茨城方面の銘酒屋料理店等に行くのであるが、何分辛い勤めに耐へ兼ねて諸所を転転して遂に親元に逃げ戻つて来る。併し料理屋等から談判されて、訴へるのどうのと脅されても、もともと金は出来ぬので相談に来る。私の方では、売られたも

のを逃げて来るのだから詐欺のやうであるかも知れぬが、結局再び料理屋へも戻らず、金も出さず済むやう警察や役場を煩はして奔走してやる。

(新田生「本所深川どん底生活記」、『太陽』第31巻11号、1925.9)

「最終局面提示」の用法は、文法的なふるまいは異なるものの、「はて、終り」を表す「結局」の体言の意味が濃厚に残っているといえる。

## 4.2 「結論的な判断提示」の用法

例 [24] と [25] の「結局」は、先に叙述された内容を受け、それによって導き出される話者の判断を結論的に提示する機能をする。このような「結局」の用法を以下では、「結論的な判断提示」の用法と呼ぶことにする。例 [24] の波線部分には、木材の表面に処理をしても、火災による木材の燃焼を防ぐことはできないという内容が述べられ、そのあと下線部分に話者の判断が結論として導き出されている。

[24] 木骨の上に鉄網を張り、その上にコンクリートを塗る方法は軽便耐火策とせられ るが、これは火の粉を防ぐに足る程度のもので、猛火に包まれた場合には矢張り抵抗力を失ふのである。要するに木材の外被に何等かの処理を試みてもその外被が烈火の為に毀損され又は高熱が外被を透して木材を襲ふ場合には、到底救はれる望がない。結局木材その物を耐火性にするより外に方法が無いことになる。

(伊東忠太「耐火耐震問題と木造建築の運命」、『太陽』第31巻1号、1925.1)

[25] 米国参戦の目的は、帝王政治を破り民主政治を興隆せしめんとするに存し、独逸の軍国主義、専制政治を根柢より打破するにあらざれば、米国は決して戈を収めな いであらうと思ふ。而して帝政なきホーヘンツォルレン家は零である。されば結局独逸の帝王政治は破滅の外ないであらう。独逸自身に於ても既に憲法改正の議があるのである。独逸の帝王政治が破滅すれば、奥地利匈牙利も是れに次いで同様の運命を免かれないであらう。

(記者(文責)；菅原通敬「米国の参戦と戦後の変動」、  
『太陽』第23巻2号、1917.2)

「結論的な判断提示」の「結局」の前後する叙述内容は、「最終局面提示」の「結局」とは違って、時間軸による展開とは関係がない。「結論的な判断提示」の「結局」の前には、話者の結論的な判断にいたるまでの経緯、すなわち判断の背景や根拠などが叙述され、最終的な話者の判断はそれに基づいて導きだされる。そのため、「結論的な判断提示」の「結局」は、抽象的な思考内容の叙述に向いており、特に雑誌『太陽』のような論説調の記事では、例 [26] と例 [27] の波線部分のような当為性を表す文末表現を伴い、話者の主張しようとするものが「結論的な判断提示」の「結局」によって結論的に述べられることが多い。

[26] 併し又、清国政府は何処までも法庫門鐵道を更らに北方に延長したいと思つて居るに違ひない。若し延長しない積りならば、何故、去年の二月、日本から提出した第二の選択案を承認しなかつたか、其理由が分らぬ。之を承認しなかつたと云ふことは、法庫門までの延長線は唯だ準備に過ぎないので、其目的は結局齊々吟爾まで延長したいと云ふ意味を含んで居なければならぬ。

(著者未詳「外人の日本観」、『太陽』第15卷11号、1909.8)

[27] 以上各項に亘り余は、鉄材の種類、製鉄の原料、世界の産額量、日本の製鉄等の問題に就いて其の大略を話したが、結局日本製鉄事業は、成る可く急速に発達せしむる必要ありとして、其の原料即ち鉄鉱と石炭との供給を如何にして豊富ならしむるかゞ差向き大に研究す可き問題である。

(齋藤大吉「鉄」、『太陽』第23卷12号、1917.10)

「最終局面提示」の「結局」が時間軸による事態の展開が最終的にいたった最後の局面を表すとすれば、「結論的な判断提示」の「結局」は叙述の論理の流れが最終的にいたった帰着点を表すものといえる。要するに、「はて、終わり」を表す「結局」の体言の意味は、「結論的な判断提示」の「結局」では論理の流れが最後に落ち着く「はて、終わり」の意味へと変化したものとみることができる。

副詞「結局」の「最終局面提示」と「結論的な判断提示」の意味用法が、「結局」の体言の意味から変化したことを指摘したが、当然「最終局面提示」と「結論的な判断提示」の意味用法もお互い関連性があることが予想される。

[28] よし教科書と違つて居ても、教師に何か信念があるならば、それが必ず或機会で露れ出るに相違ないが、それもないから、結局修身教授は極めて平板なものとなるより外に道はない。(兆水漁史「教育時言」、『太陽』第23卷12号、1917.10)

[29] 真面目な人は誰しも第一に感じたことであらうが、議案の研究はもつと慎重にやらねばならぬ。これは何等か完全な方法を立て、平生より夫れ〜研究して置くことにしたい。今のところでは政党に立派な研究がないから、結局政府案が一番よいといふことになるやうだ。

(気賀勘重「有害無益の戦争」、『太陽』第23卷10号、1917.9)

例 [28] と [29] では、波線部分の原因・理由の条件のもとで最終的に行き着く結果の状態が叙述されている。上記の例は、時間軸による事態の展開はみられないが、最終的に行き着く結果が示されている点では、「最終局面提示」の意味用法に似ている。一方、ある原因・理由とそれによって行き着く結果の状態という論理の流れが叙述されていること、最終的に行き着いた結果の状態が話者の判断としても受け取られる点では「結論的な判断提示」の意味用法にも近い。上記の例は、「最終局面提示」と「結論的な判断提示」の中間的な性格のものといえる。副詞「結局」の二つの意味用法は、本来の体言の「結局」の意味と関連性があり、両者の間の中間的な性格の例も存在することをことわっておく。

## 5. まとめ

本稿では、明治の言文一致期以降明治末期までの国語辞書類及び小説、教科書、啓蒙書、小新聞、雑誌『太陽』の調査を通じて、当時における漢語副詞「結局」の使用状況及び「結局」が使われる文の文体的特徴を概観した。そして、『太陽コーパス』の調査を通じて、1895年から1925年の間、副詞「結局」の使用頻度が高くなり、「結局」の副詞用法が定着していく傾向がみられることを確認した。さらに、漢語副詞「結局」の意味用法を「最終局面提示」と「結論的な判断提示」の二つに分け、それぞれの意味用法の特徴について考察した。今後、副詞「結局」と意味用法が似ている和語副詞「とうとう」「つまり」との関係について考察していきたい。

### 《言文一致期以降明治末期までの資料の作品目録》

- 【小説】伊藤左千夫『野菊の墓』（1906）、尾崎紅葉『金色夜叉』前編、中編、後編（1897-1900、会話文だけを対象）、国木田独步『武蔵野』のうち『河霧』『鹿狩』『まぼろし』『武蔵野』『忘れぬ人々』の5作品（1901）、谷崎潤一郎『刺青』のうち『麒麟』『刺青』『少年』『秘密』『幫間』の5作品（1910）、夏目漱石『坊つちやん』（1906）、夏目漱石『吾輩は猫である』上編（1905）、二葉亭四迷『浮雲』第一編（1887）、第二編（1888）、第三編（1889）、山田美妙『夏木立』のうち『籠の俘囚』『玉屋の塵』『花の茨、茨の花』『柿山伏』『仇を恩』『武蔵野』の全作品（1888）、若松賤子訳『小公子』（1890-91）\* 以上の内、『浮雲』第三篇は早稲田大学図書館所蔵のマイクロフィッシュを使用し、ほかは近代文学館の復刻版を使用。
- 【教科書】文部省『尋常小学読本（イエスシ読本）』第一期（1904年より使用）  
文部省『尋常小学読本（ハタタコ読本）』第二期（1910年より使用）  
国立国語研究所国語辞典編集資料『国定読本用語総覧』1-3（1985、1987、1988）による。
- 【啓蒙書】加藤弘蔵『交易問答』（1869）早稲田大学中央図書館蔵、加藤弘之『真政大意』（1870）早稲田大学中央図書館蔵、福沢諭吉『学問ノス、メ』（1872-76）、進藤咲子編『学問ノス、メ本文と索引』（1992、笠間書院）による。福沢諭吉『訓蒙窮理図解』（1868）『福沢全集第二巻』（1926、時事新報社）による。
- 【小新聞】『読売新聞〔東京〕』（1874年11月から1875年7月までの分）  
国立国会図書館所蔵のマイクロフィルムを使用。欠落した日付や読み取り不可能な日付の分は除く。
- 【雑誌『太陽』】国立国語研究所編『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース』（博文館新社、2005）のうち、1901年度1号から12号の記事のうち、小説を除いた口語体の記事

## 【参考文献】

### 《辞書類》

- 『和英語林集成初版』(1867), J.C.ヘボン  
『和英語林集成再販』(1872), J.C.ヘボン  
『和英語林集成第三版』(1886), J.C.ヘボン  
『漢英対照いろは辞典』(1888), 高橋五郎  
『日本辞書言海』(1889~1891), 大槻文彦  
『日本大辞書』(1892~1893), 山田美妙

### 《単行本・論文類》

- 池谷清美(1983)「やはり、なるほど、あいかわらずの意味」『Sophia Linguistica』11, pp.156-164  
上野隆生(2007)「雑誌『太陽』の一側面について」, 和光大学総合文化研究所年報『東西南北』2007, p.252  
国立国語研究所編(2005a)『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』研究論文集—』, 博文館新社, p.28  
国立国語研究所編(2005b)『『太陽コーパス』雑誌『太陽』日本語データベース CD-ROM用解説書』, 博文館新社, p.5  
野村雅昭(1998)「現代漢語の品詞性」, 『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』, 汲古書院, pp.136-137  
森元順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』, くろしお出版, pp.135-137  
山田孝雄(1936)『国語の中に於ける漢語の研究』, 宝文館, pp.205-276  
渡辺 実編(1983)『副用語の研究』, 明治書院, pp.1-69

## 要旨

本稿は、現代日本語において使用頻度の高い漢語副詞「結局」の副詞用法の定着及び意味用法について考察した。明治期の国語辞書類の調査では、明治20年前後には主に体言として使われていたことが確認できるが、副詞用法はそれほど定着していなかったとみられる。言文一致期以降明治末期までの作品の調査を通じて、副詞「結局」は意味が似ている和語副詞「とうとう」ほど頻繁に使われていなかったことと主に論説調の硬い文体に使われる傾向が確認された。

『太陽コーパス』を使って年次を追って調査した結果、1895年以降1925年の間、「結局」の副詞以外の品詞の使用例は減少し、副詞としての使用例は増加する傾向がみられた。

副詞「結局」の意味用法は、文中ではたらしきによって二つに分けて考えることができる。ある事態が最終的に帰着する局面を提示する「最終局面提示」の用法と、先に叙述された内容を受け、それによって導き出される話者の判断を結論的に提示する「結論的な判断提示」の用法である。「最終局面提示」の用法の「結局」の前後の事態は時間的に前後する関係にある。一方の「結論的な判断提示」の用法の「結局」の前後の叙述内容は論理の流れの前後関係にある。両方の「結局」の意味用法は、ともに「結局」の体言の意味である「はて、終り」の意味と通じるところがあるといえる。

キーワード：漢語、副詞、雑誌『太陽』、「とうとう」、「最終局面提示」、  
「結論的な判断提示」

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1